シリーズ石見銀山㉒ 暗闇を灯す ―石見銀山で使われた灯りの道具―

大田市のマスコットキャラクター“らとちゃん”。このモチーフとなっているのは、石見銀山の採掘作業で活躍した照明器具です。栄螺（さざえ）の殻を使っている灯りということで「螺灯（らとう）」と呼ばれています。今回は、石見銀山の暗闇を灯した道具をご紹介します。

螺灯の存在は、『石見銀山絵巻』という江戸時代の採掘や銀製錬の様子を描いた絵巻物で確認できます。この絵巻物、作者や画作年代は不明ですが、内容から、江戸時代の後半に描かれたといわれているものです。絵巻物の中では、坑道の中を歩く鉱夫の手の中や、岩壁に向かってノミを打つ鉱夫の近くに、炎の灯った栄螺の殻が必ず描かれています。史料には「敷内（坑道）へ行き候者、栄螺がらに胡麻油、綿燈心をいれ火を灯し」とあり、胡麻かエゴマの油を燃料としていたようです。

新潟の佐渡金銀山にも『佐渡金銀山絵巻』という絵巻物が存在します。コピーしたかのように構図は同じですが、この絵巻物で鉱夫が手に持っているのは螺灯ではなく、素焼きの皿に火を灯した照明器具です。鉱山によって、特色のあることがわかります。

時代が経つにつれ、鉱山で使われる照明はカンテラや電球、ヘッドライトへ変わっていきます。技術が進歩しても、坑道という暗闇にはどれも小さな灯りのままでした。

現在、限定公開をしている大久保間歩では、解説ポイントまで照明は一切ありません。漆黒の闇の中を、懐中電灯の灯りだけで進んでいきます。

江戸時代の鉱夫たちは、小さな栄螺の殻に灯りをともし、同じ坑道の中を歩いていました。小さな灯りを手にして、鉱夫たちは暗闇の向こうに何を見ていたのでしょうか。

掘る鉱夫

歩く鉱夫

『石見銀山絵巻』（個人蔵）より

【問】石見銀山世界遺産センター　☎0854-89-0183
ホームページ　http://ginzan.city.ohda.lg.jp/

ちょんぼし語録⑭

夫：さぁて、朝飯も食ったし、田行くこしらえするかのぉ

妻：洗いもんをすめてから、てごしに行くけぇ。先行っといてや

夫：お～い、ちょっと来てみ～。えらいことになっとるで

妻：朝っぱらからでかい声して、どがしたかな

夫：ちゃんと犬繋いどかんけ、庭をわやにしてしもーとるで

妻：そがなことゆうたてて、夕べちゃんと繋いどったに～

夫：あんたちょちょくさだけ、ように繋いどらんかっただないだ

妻：そがなことあらせんわね。猿かなんぞが畑に出て、犬がたまげただないの

夫：あがいえばこがゆうのぉ。まーいいけ、はや来て見なはい。あんたが大事にしとる植木鉢がめげとるで

妻：なんたことだかいな。田行く前に、ひと仕事せんといけんようになったがぁ

【対訳】

夫：さあ、朝ごはんも食べたので田んぼに行く準備をしようかな

妻：洗いものを済ませてから、手伝いに行きます。先に行ってください

夫：お～い、ちょっと来てごらんよ。すごいことになっているよ

妻：朝から大きな声を出して、どうしたの

夫：きちんと犬を繋いでいなかったから、庭をめちゃめちゃにしてしまっているよ

妻：そんなこと言ったって、夕べきちんと繋いだのよ

夫：君はあわてものだから、きちんと繋いでいなかったんじゃないかな

妻：そんなことはないはずだわ。猿か何かが畑に出て、犬が驚いたんじゃないかしら

夫：ああ言えばこう言うね。まあいいから、早く来て見てごらんよ。君が大事にしている植木鉢が壊れているよ

妻：なんてことでしょう。田んぼに行く前に、ひと仕事しないといけないようになってしまったわ